監獄から解放されたと思ったら仮想世界に閉じ込められた

超高校級の絶望家

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの地獄の日々から解放されたキヨシと仲間達。

裏生徒会と表生徒会の争いに巻き込まれた慌ただしい生活も落ち着きを見せ、学生生活を謳歌していた彼らの前に事件が訪れる！

目　次

グッドモーニングプリズナー ―― 1
尻の探求者 ―― 11

グッドモーニングプリズナー

「練馬一の知将もここで終わりでゴザルか……関羽様、小生あなた様の様な英雄にはなれなかったでゴザルよ」

満身創痍のガクトの目の前には彼の背丈の１０数倍もあろう巨大な化け物が今にも首を掻き切ろうと自身の持つ両腕の先端にある巨鎌を振り上げていた。

「ガクトっ‼?」

「ガクト君‼?」

「ごふっ……ガクト……」

まさに絶体絶命。ガクトの学友であり無二の親友であるシンゴ、アンドレ、ジョーは化け物が荒らした戦場の中身動きすらとれず、今にも消えてしまいそうになる仲間の事を涙を流しながら見ていることしかできない。

助けたいッ。しかしもう身体を動かすことすら出来ない……。

無限に思える数秒。絶望の中彼らは祈った。

誰か……俺達の仲間を助けてくれ‼?

ガクトを見つめる化物の二対の四つ目が青い炎を燃え上がらせギシャァァァァァァ

アっと唸りをあげる。
振り下ろされる巨鎌。
シンゴ達だけではない。そこに居合わせた、志同じくこの化け物を倒す為に集まった戦士達全てが諦めた。
そう、彼の命はここで終わるのだ。
「ガァァァクゥウウトォオオオオ！」

◇◇◇◇

「っていう夢を見たんだよ」
「つまり小生はキヨシ殿の夢の中で無残な死を遂げたということでゴザルか」
「いやいや、惜しかったんだけどな。もう首を落とされる直前ってところで目が覚めたんだよ」
食堂にあるテーブルの一角に男子生徒５人が一つにかたまり昼食をとっていた。
ここ私立八光学園は去年までは全寮制の女子校で近隣では有名であったが新理事長の就任と共に今年から男子生徒の受け入れを開始した。

その栄えある1期生として学園に入学した男子生徒は5人。それがここにいる藤野清志（通称キヨシ）諸葛　岳人（通称ガクト）若本　真吾（通称シンゴ）根津　譲二（通称ジョー）安藤　麗治（通称アンドレ）である。

彼らは入学早々に覗き事件を起こし学園内に備えられたプリズンで辛く過酷な刑務作業を共に乗り切ったことで確かな絆を手に入れた俗に言う親友と呼べる関係であった。

もちろんその中には拳で語り合った苦い記憶もあるが男子高校生にとってそれは青春であり学園生活におけるスパイスでしかないのだ。

「惜しかったじゃないでゴザル!!?　　例え夢の中といえど小生をそんな無残に殺すなんて……人でなしとはキヨシ殿のような男を指すのでゴザル!!?」

キヨシの夢物語に憤りを感じたガクトは激しく音を立てて立ち上がり発狂する。その際に机から転げ落ちたコップが床に水を撒き散らした。

「ゴフッ……うるさいぞ。食事の時くらい静かにできねぇのか……」

「す、すまないでゴザル。つい我を忘れてしまい……」

常時ひどい口内炎を患っているジョーが咳払いをしながら文句を言い放った。

叱咤を受けて落ち着きを取り戻したガクトはいそいそと近くにあった紙ナプキンを使い地面を拭いていった。コップはプラスチック製のもので大惨事だけは免れたよう

だ。
「悪かったよガクト。でも俺だってあんな殺伐とした夢なんかより、千代ちゃんともっとこう……もっとこういろいろする夢を見たかったんだよ！」
　キョシの弁明はもはや弁明と言うよりも自分の欲求をブチまけたものだったが、頭を冷やしたガクトは頷きながら先の件は水に流したのだった。
「それにしてもキョシよぉ、体育祭終わったら告白するって言って結局いつになったらするんだよ？」
「うっ……それは、いざとなったらなかなか実行に移せなくて」
　体育祭、実際はこの学園に存在する2つの生徒会、表と裏の政権争いだったのだが、ある重大な使命の為裏生徒会に手を貸していたキョシ達。
　紆余曲折はあったものの波乱の体育祭は突然終わりを告げた。
　あれから数ヶ月、慌ただしかった1学期が終わり2学期に差し掛かった今、八光学園はかつての落ち着きを取り戻していた。
　キョシは彼の想い人である栗原　千代に告白する決心をつけた筈だったのだが、もう随分昔に感じる程の月日が経った現在も未だに実現には至ってないようだ。
　そう、これは原作とは違った未来を辿ったエピソード。彼らの物語は今も続いている。

「それにしてもあの時はビビったよな。キヨシが突然覚醒した時はよ」
「まさか花殿や会長殿に〝愛してる〟なんて言い出すとは小生武者震いを覚えたでゴザルよ」
「いいなー。僕はその時リサさんとの隷属関係のおかげで記憶が曖昧なんだよね」
「リサ殿に完全服従したアンドレ殿の姿はまさに赤兎馬そのものでゴザったよ」
彼らが話しているのは体育祭の騎馬戦での出来事である。圧倒的な戦力差を覆すべく裏会長栗原　万里が行った苦渋の策。快進撃を続けた彼らだったが再び敵に阻まれることになる。勝利の為にある種暴走した裏生徒会書記の緑川　花はこの手しかないとキヨシの説得にはいる。
キヨシはある事情により花の女性下着、縞パンを着用していた。そしてその時行っていたキヨシのいきり勃ったエリンギ見せつけた戦法に加え女性下着を眼前の敵に晒すことで突破口を開こうとしたのだ。
しかしキヨシは拒む。勿論だろう。〝女性下着を着用し勃起したイカれたド変態〟のレッテルなんてだれが貼られたいものか。
キヨシにとってそれは絶対に回避しなければいけない羞恥のプレイ。だがそれでも勝利を諦めない花は更に説得を続けた。その説得の中キヨシはあるフレーズに心を揺れ動かされた……〝本物の勇者〟という言葉に。

『ヒーロー！　いや勇者‼？　あいつらに目にモノ見せてやれ！』
『はい！　見せつけてやります！』
『いくぞ！』
『えぇ……思いっきりいってください‼？』
それを思い出すだけでキヨシは頭を抱えたくなった。
バチンッとこだました彼のヒーローが腹を叩きつけた音。勢いよくパンツを下された弾みで飛び出してしまった彼のヒーロー。
その時キヨシは自らを恨んだ。世界を恨んだ。
そして……憤死した。
「ボッキヨシ……げふっ」
「その話はもうやめようぜ」
ジョーの胸神経な発言に顳顬を一度押さえたキヨシはこの話の打ち止めを提案する。
こっちの世界に戻ってこれたのはよかったがあの一件以来大衆の面前で恥部を晒しその上女性下着まで着用したイカれたド変態のレッテルを貼られ、すれ違う女子達からは陰口まで言われる始末。まぁキヨシの衝撃が強すぎたおかげというべきなのか万里達の失態は忘れ去られ戦いを終えた裏生徒会は徐々に権力を取り戻しつつある。
「もうそろそろ昼休みも終わりだから教室に戻ろうぜ」

シンゴの提案で各々の教室に向かう男子達。途中まで同じ廊下を歩いた彼らだったが徐々に教室に入っていき最後はキヨシ1人が廊下を歩くことになった。

その道中にキヨシを見て顔をしかめる女子生徒は多い。最初の頃程酷くはないが数ヶ月経った今もキヨシに対する非難の目は無くなっている訳ではなかった。

しかし彼の精神力はもはや常人を超越していた。陰口どころでは全く動じぬ強い心を手に入れたキヨシにとってはこれほどの事は造作もないのだ。

だが、そんなキヨシの精神を揺らがせる存在もいる。

ようやく目的地に辿り着こうかというところで自分の教室の前に立つ1人の女生徒を見つけ「しまった」と後悔する。

「人の顔みてなんで嫌そうな顔してるんだよ」

「いえ、嫌そうな顔なんて……」

本来ならば自分の教室の前で待っていてくれる女子がいるなんて男子高校生にとっては最高のシチュエーションでしかないわけだが、キヨシにとってこの女生徒は違った。

因縁……彼女とはその言葉が相応しい。入学してから今日まで様々な事があった。まさに他人には言えない〝普通〟の高校生が経験出来ないような事だ。

今キヨシの表情が曇ったのには理由がある。何故なら彼女と絡むと文字通りロクな

事が無いからだった。
「1年の教室に押しかけてなんのようですか？　　花さん」
「キヨシ、アンタ今日の放課後ちょっと付き合いなさいよ」
キヨシを待っていたのは緑川　花。裏生徒会書記でファンシーな雰囲気を漂わせたゆるふわ系女子。誰が見ても美少女である彼女だが空手でインターハイベスト4の実力者であり、その恐ろしさをプリズンで過ごした男子5人は身をもって体感していた。
瞬殺の蹴りを繰り出すお仕置きに陰で〝暴君〟と呼ぶ彼らだがキヨシだけは花に対して全く別の恐怖を抱いている。
花は今まで何度もキヨシに復讐しようと迫ってきた。それも並大抵ではない執念で……。そしてその度に傷口はどんどんと広がっていき2人の関係をもしも見ている人間がいれば「完全にアブノーマルなカップル」と言葉にするだろう。客観的にそう判断したキヨシはこれ以上泥沼に嵌らない為に少しでも花との距離を開けようとしていたのだが、まさか教室の前で待ち伏せされるとは思ってもいなかった。
「何かあるんですか？」
「あっ？ぐちぐち言ってないで黙ってついてきたらいいんだよ。アンタの部屋まで迎えに行くから授業終わったらすぐに部屋戻りなさいよ」
有無を言わさず用件だけ伝えるとフンっと鼻を鳴らし自らの教室に戻っていく花。

その後ろ姿を見て何かまた大変なことになりませんようにと神様に祈りながらキヨシは大きく溜息をつく。

「溜息なんてついてどうしちゃったの？」

背後から声をかけられたキヨシはゆっくりと振り向く。するとそこには彼の想い人である栗原　千代が少し心配そうな顔をしてこちらを伺っていた。

「いや、なんでもないよ。さっ、次は数学だったかな」

「溜息なんかついてたから何かあったんだと思ったよ。元気そうでよかった」

千代の素敵な笑顔を見るだけで先までの憂鬱な気分は吹っ飛んでしまったキヨシは少しオーバーに腕を回しながら自分の席に向かう。

「そうだキヨシ君、来月にまた学生相撲大会があるんだけど今回も一緒に行ってくれないかな？　　やっぱり相撲に興味ある人と行きたいなって思って」

彼女の笑顔はキヨシにとって最高の栄養剤だ。勿論断る理由なんてないだろう。告白すると決めてからは少し怖気づいてなかなか声をかけられなかった千代からの誘いなのだから。

「絶対いくよ！　　なにがあっても‼？」

「なにがあってもはダメだよ！　　大事な用があったら断ってくれていいからね。でもよかったぁ。キヨシ君とだったら私も凄い楽しいし」

ああ、なんて幸せなんだ。こんな時間が永遠に続いたらいいのにと思った矢先、丁度チャイムが鳴りキヨシの甘い願いは数学教師の入室により終わってしまった。

しかし、思いもしなかった千代とのデートの約束を果たしたキヨシは少し顔を高揚させいつも以上に気合をいれ授業に取り組んだ。

千代ちゃんとデート。俺はこのデートで絶対に告白してみせる‼?

心の中で決意したキヨシはふと昨夜見た夢の事を思い出す。

凄いリアルな夢だった……ガクトが死ぬ?

なにか良くないことが起こらなければいいけど。

キヨシはふとそんな事を思ったがそれよりも来月のデートが大事だと一度頭を振って数学教師の授業に耳を傾ける。いくら優しい千代だからとはいえ成績の悪い男の事を好きになってくれるとは思えない。先ずは目の前の事を必死にこなそう!

そう思ったキヨシは授業に真剣に取り組む。

その時キヨシはまだ予想だにしていなかったのだ。あの夢が彼らの未来を予知していたものだと……。

尻の探求者

「そうか。知らぬ間に随分と立派になったものだ……な」

口髭を生やし、渋い顔つきをしたこの男。八光学園の理事長で、裏生徒会会長である万里や千代の父親である。

彼は理事長室のデスクに備えられたパソコンに開かれたとある記事を見て、自分を慕ってくれていた同士の功績が載っていることに誇らしい気分になっていた。

ちなみに同士とは言うまでもないだろう、理事長は無類の尻好きで理想のヒップを追い求めここまで登りつめたムッツリスケベなのだ。

そんな彼の生き方に共感して慕った者は……決して多いとは言えないが存在はしていた。この記事に紹介されている男もまさにそんな稀少な1人であったのだ。

「進む道は違えど尻への愛は同じ。きっと今も素敵なヒップを追い求めているのだ……ろう!!?」

理事長は青年との出会いを思い出す。それはもう10年も前に遡るだろうか。青年がまだ学生服を着ていた頃だった。

◇◇◇◇

『少年よ。こんなところで一体何をしているのだ……ね』

当時はまだ八光学園に赴任していなく、世界各国の教育現場を視察していた理事長は数年ぶりに帰ってきた日本で不思議な少年と出会った。

その日は本州に台風が近づいていて、かなり雨風が強い日だった。そんな中で雨具も無しに両腕を広げている少年に興味が湧き、わざわざタクシーを降りてまで思わず声をかけてしまった。

少年は虚ろな目で振り返る。

少し目が合ったと思えばまた同じ方向へと視線を戻した少年はなにかボソボソと話し出した。

『時速６０ｋｍで走る車の窓から手を出すとＤカップの胸の感触を得られるという話はご存知ですか？』

『うむ、聞いたことは……ある』

理事長は失望した。少年を見たとき何か惹かれるものを感じたのだが結局開口一番

は胸の話。やはり若者に尻の魅力は分からないのだろうとその場から離れようと思ったが、少年は言葉を続けた。

『では、どれ程の風圧であれば尻の弾力を感じることができるでしょうか』

心臓がドクんと音を立てた気がした。額を流れるのは打ち付けられた雨なのか、または興奮により湧き出た汗なのだろうか。

『僕はこの世界に絶望しています。何故人は胸に憧れを抱くのか……何故人は胸を女性の象徴だと崇めるのか。解り合うことなど出来やしない。恐らく僕は人を超越してしまった』

少年は呟き、バレーのトスを上げるように腕を挙げながらそこにまるで尻があるかのように撫で回し揉みほぐした。

『これではないんだ。これは僕の理想の感触ではない』

理事長はそんな少年の姿を見て自分の中の最も大事なモノが高鳴るのを感じた。そう、この少年もまた自分と同じ境地に立つものだと気付いたのだ。

『貴方は尻と胸、どちらが好きですか？』

突然振り返った少年はこう質問した。その目は相変わらず虚ろなままだったが声には芯があった。少年の目を改めて見た理事長は彼の気持ちを理解できた気がした。自分の理想、それが他人のそれとは違う違和感。受け入れてもらうことが出来ない性癖。

十数年の人生を孤独に生きてきたであろう彼のその絶望が。
『ふむ。考えるまでもない……尻……だ！』
『意見が合いますね』
少し驚いた表情を見せた少年は手を顎にあてほんの数秒思考した後に再び口を開いた。
『しかし、まだ認めるわけにはいきません。さっきまでの会話の中で僕が尻好きだと判断し話を合わせた……という可能性もある』
少年の発言に理事長は苛立ちを覚えこめかみに皺を寄せる。この私の尻好きを疑っている……だと☒
『なぜ尻なのか……貴方が本当の尻好きなら……〝本物〟の尻好きなら答えられるはず。なぜ胸ではなく、尻なのか』
尚も真剣に質問を続ける少年。しかし理事長は微笑した。簡単なことなのだ。考えるまでもない。そこに尻があるから。そう、好きに理由など……ない‼？
『予め言っておきましょう。僕は尻好きと公言する者に対しこの質問を繰り返し、そして失望してきました。好きに理由なんてないという答えに』
『なん……だと☒』
『尻が好きと口にした以上、理由がないなどただの逃げ口上。そうだとは思いませんか

？』

確かに彼の言う事には一理あると理事長は思考した。

私は尻が好きだ。そして本能の命じるがままに目の前のヒップを求めてきた。そしてその欲望は留まることを知らずついには外国にまで手を伸ばした。

理由……か。理事長は生きてきた数十年の尻人生を振り返りその奥にある本質に手を伸ばす。自分の心、自分の生きる意味……。

『赤ん坊が産まれる時、多くの子どもは母親の尻を向きながら産まれてくる。これを〝前方後頭位〟という。つまり、人はこの世に生を受けた時、その最初に目にするのは母親の尻なの……だ‼？　　産まれた喜び、そしてそれを1番に祝ってくれるものはそう、尻だ。授乳するための胸など所詮は育ての親。産みの親こそ尻。尻こそが人間の原点、本質。人間は尻より生まれ、尻に還る。少年よ、そうは思わない……かね‼？』

理事長の熱い想いに少年は肩を震えさせた。そして足元に落ちる美しい水滴。決して現れるはずのないと思っていた自分の理解者が現れたのだ。余りの感激にとうとう嗚咽まで漏らす少年を理事長は優しく包み込むようにして抱きしめた。それはまさに子を愛す母親のように。

『今まで寂しかったのだろう。真に自分を受け入れてもらえる存在がいなかった事に……。君の求めてた存在はここに居る。同好の士……よ』

『貴方は僕の救いです』
暫く理事長の胸板で涙を流した少年は落ち着きを取り戻し腕で涙をぬぐった。
そして理事長に向き直った目は先程までの虚ろなものではなく希望に満ちた目へと変わっていた。
『ふむ、グレイトな目になった……な‼?　　私は栗原という、君の名は?』
少年の年相応に輝く目を見た理事長は、口髭を少し撫でて誇らしく微笑んだ後に名を名乗った。そんな姿を見た少年はクスリと笑い自分もまた名を名乗る。
『僕は茅場……茅場　晶彦です』
『晶彦か。いい名……だ‼?』

◇◇◇◇

茅場　晶彦、量子物理学の専門家で天才的ゲームディレクターと言われている。
理事長の見ていた記事には〝これはゲームであっても遊びではない〟とライターからのインタビュー記事が掲載されていた。

一度コーヒーで喉を潤した理事長は大きく溜息をついた。
自分と同じ志を持った同士の活躍は単純に喜ばしいものである。それが息子同然と想い接してきた彼ならば尚更だった。
しかし、実は理事長と茅場はここ数年絶縁状態であったのだ。
それは現実世界と仮想世界という相容れない二つの世界に魅入られた男達のすれ違い。
両者の理想への追求が引き起こした追突。
激しい口論の末に二人は別々の道を歩むことになった。
彼の求めている世界に共感することは決して出来ないが、彼の尻への愛を誰よりも理解している理事長は複雑な気持ちで彼の完成させたゲームのパッケージを見る。
『ソードアート・オンライン』
このゲーム制作が理事長と茅場を引き離すことになった大きな原因だったのだ。
類稀なる才能と、大いなる理想を持ち、それを磨き続けた少年はやがて仮想世界を作り出しそこに自らの理想を創り上げた。
だが、理事長にはどうしても受け入れることが出来なかったのだ。作り物、紛い物の尻になんの価値があるのかと。
「これはゲームであっても遊びではない……か」

理事長は茅場が発言した言葉の真意を読み取る。

〝私の尻への探求は遊びではない〟これは晶彦から私へ発せられたメッセージであると理事長は確信していた。

作り物ではないと言いたい、ということか。

茅場の真意を確認すると同時に、理事長は数ヶ月前に男子生徒達とのやりとりを思い出していた。

『所詮おっぱいはお尻のまがいものに過ぎないのです‼?』

藤野　清志、彼が本物の尻好きかを確認する為にかつての茅場の言葉を用いた。そして彼は見事に照明してみせた。己の内から涌き出でる欲求の理由を熱いシャウトに乗せて。

キヨシ君も我が人生において数少ない同士だ。あの若さであそこまでの愛を持てるなんて将来に期待できる。そういえば出会った頃の晶彦も彼と同じような歳頃だったかと理事長は考える。

理事長の人生のモットー、それは〝尻好きに悪い人間はいない〟だ。

茅場も尻を愛した男。意地の張り合いで仲違いしてきたが、もうそろそろ彼の意見を受け入れる時が来たのかもしれない。

「ソードアート・オンライン、ここに晶彦が理想を詰め込んだと言うのなら、一度見てみ

るべきだろう。素敵なヒップを求め……て!!?」